

## サムエル記第一24章 1-7 節 「仕返しをしない心」

### アウトライン

#### **1A 主権者におもねる王**

1B 柔和な者

2B 引き上げられる主

#### **2A 権利と力の放棄**

1B 御心ではない符号

2B 弱さを担う強い者 – イエス様

#### **3A 主に油注がれた者**

1B 上からの権威

2B 愛をもった服従

#### **4A 裁きの委ね**

1B 主の命令

2B 他者に対して

3B 自分に対して

### 本文

今朝の本文は、サムエル記第一 24 章 1-7 節です。午後礼拝では 22 章から 24 章までを学んでみたいと思います。

1 ダビデはそこから上って行って、エン・ゲディの要害にとどまった。2 ペリシテ人を追い払って帰還したサウルに、「ダビデはエン・ゲディの荒れ野にいる」と伝える者があった。3 サウルはイスラエルの全軍からえりすぐった三千の兵を率い、ダビデとその兵を追って「山羊の岩」の付近に向かった。4 途中、羊の囲い場の辺りにさしかかると、そこに洞窟があったので、サウルは用を足すために入ったが、その奥にはダビデとその兵たちが座っていた。5 ダビデの兵は言った。「主があなたに、『わたしはあなたの敵をあなたの手へ渡す。思いどおりにするがよい』と約束されたのは、この時のことです。」ダビデは立って行き、サウルの上着の端をひそかに切り取った。6 しかしダビデは、サウルの上着の端を切ったことを後悔し、7 兵に言った。「わたしの主君であり、主が油を注がれた方に、わたしが手をかけ、このようなことをするのを、主は決して許されない。彼は主が油を注がれた方なのだ。」

私たちの前回の学びは、ダビデがサウルの手から逃れる逃亡者の生活を始めたところで終わりました。初め祭司アヒメレクの所に行き、パンと剣を手にし、それからペリシテのガテまで行き、

そこで捕えられました。けれども奇跡的に救われました。その後、サウルは執拗にダビデを追跡します。そして今、死海のほとりにあるオアシス、エン・ゲディにいます。エン・ゲディには数多くの洞窟があります。その一つに隠れていたところ、今読んだように、サウルが用を足しに来たのです。(他の訳では、休憩を取りに来た、というように訳されています、一寝入りしていたのかもしれませんが)部下たちは、「今こそ、仕返しをする時です。」と言いましたが、ダビデはそれを強く制しました。

### **1A 主権者におもねる王**

ダビデの生涯の中で重要な出来事は、ゴリヤテとの戦いであると以前私は話しました。けれども、それに次いで重要な出来事は、ここの話であると思います。それは、ダビデがイスラエルの王となるのに自分の手で敵を打つことはなかった、ということです。これからの話は、ダビデがたった一度も自分がイスラエルの王となるのを阻む敵に対して、剣を向けることがなかったことで一貫しています。むしろ、ダビデの敵を滅ぼしたと報告する者たちに対して、死刑に処することさえします。彼は、仕返しをすることを知らない人でした。

### **1B 柔和な者**

ダビデは、主にとって「ご自分の心にかなう人(1サムエル 13:14)」と呼ばれました。彼の生涯は、数多くの欠点や失敗があったのに、なぜご自分の心にかなう人という高い評価を神が下されたのでしょうか？マタイ5章5節に、イエス様が八つの祝福の中でこう言われました。「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。(マタイ 5:5)」ダビデもイスラエルの王として、地を相続する者となりましたが、地の相続者の特質は「柔和な者」であるとイエス様は言われます。私たちが何かを得たいと思えば、必ず思う浮かぶ発想は「競争」です。他の人を蹴落として、それで自分でそれを得なければ得ることはできないと考えます。混雑した電車の座席取り、正月のスーパーにおける福袋を思い出せば分かるでしょう。けれどもイエス様は反対のことを言われます。「柔和な者」だということです。

「柔和な者」の正確な意味をお話しします。ギリシヤ語、特に古代のギリシヤ語はその語彙が世界の言語の中でも最も多いものであると言われていています。それで、言葉の曖昧さが少なく、正確に伝えられるそうです。この「柔和」という言葉の反対語は何だと思えますか？「復讐」だそうです。仕返しをしないのが柔和だ、ということです。したがってダビデは、まさにその典型の人物です。彼は、柔和であったがゆえにダビデの座にメシヤが着かれることになるのです。

ダビデの柔和な性質はどこから出てきたのでしょうか？それは、彼は王として召されていただけでなく、自分自身がまことの王である神に服していたからです。神が主権者であられ、神に全権を委ねていました。彼は、いっさい手を下すことなく王となっていきますが、全イスラエルの王として任命された後に彼が行なった始めのことは、神の箱をエルサレムにある自分の町に運ばせたことです。彼は、自分が王ではなく、神なる主がまことの王であることを、その礼拝によって示したかっ

たのです。

サムエル記第二 6 章 13-15 節にこうあります。「主の箱をかつぐ者たちが六歩進んだとき、ダビデは肥えた牛をいけにえとしてささげた。ダビデは、主の前で、力の限り踊った。ダビデは亜麻布のエポデをまとっていた。ダビデとイスラエルの全家は、歓声をあげ、角笛を鳴らして、主の箱を運び上った。」彼は、主を神として礼拝し、賛美したので、彼と一般のイスラエルの民との間には隔たりがありませんでした。彼は平民と同じように、王服を脱いで亜麻布だけの服装で主の前で踊ったのです。

## 2B 引き上げられる主

このように、主に全てのことを明け渡す人が柔和になることができます。そして柔和な人、あるいはへりくだった人とも言えるでしょうか、そのような人を神は引き上げてくださいます。使徒ペテロが、第一の手紙でこう勧めています。「ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです。(5:6)」神が力強い御手を持っておられます。私たちが良かれと思っていること、こうしなければいけないと正しく思っていることがあります。そして、「私がしなければいけない」と思っている強い意志があります。けれども、すべての事が神から来ていることを認めるのです。それが「神の力強い御手」と呼ばれています。

「というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。(ローマ 11:36)」私たちが、自分の強い意志を、状況によって起こされている神の主権の中で落とします。自分の強い意志を、神が御言葉でこう言っているという理由だけで、落とします。私たちは自分の強い意志を、熱心な祈りの中で落として、主に新しい心を造ってくださるよう願います。そうすることによって自分自身を低めた者は、神が必ず高めてくださるのです。

## 2A 権利と力の放棄

### 1B 御心ではない符号

では、本文をご覧ください。サウルが、ちょうどダビデたちが隠れている洞窟の中に入ってきました。5 節をご覧ください。「ダビデの兵は言った。「主があなたに、『わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。思いどおりにするがよい』と約束されたのは、この時のことです。」」ダビデの兵たちの考えは、至極尤もです。こんな奇遇は、神によってもたらされたものでなくて何でしょうか？それ以前、主がダビデに「わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。」と約束しておられるのです。

私たちにも、このようにあまりにも符号が合っていて、これは神の御心ではないかと思うことが起こることがないでしょうか？気の合った友達はどうでしょうか？自分の理想の人を祈っていたら、まさにその理想に合った人に出会った、ということもあります。偶然に重なり合った出来事はどうでし

ようか？自分の仕事で、うまく事業が進んだであるとか。

ある国でのことです。宣教師はいつも、滞在ビザについて、いつまでいることができるのかという課題があるのですが、ちょうど、あるクリスチャンから、無料で会社を譲り渡すという話がある宣教師にもたらされました。その会社があれば、就労ビザを取得することができます。それで、喉から手が出るような思いで最終的な手続きをしに行きました。けれども、実際の手続きの時にどうしても心に平安がなかったそうです。それでなんと、断って帰ってきました。とても良い話ではあったけれども、クリスチャンの基準に照らし合わせてどうも違うと思っただけです。

私たちは、話がうまくいっている、出来事に符号がある、そのようなものから安易に神の御心を判断するのではなく、むしろ、神の御心は私たちのうちにキリストが形造られていくことなのだということを覚えるべきです。ローマ 8 章 28 節に有名な御言葉があります。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益とさせていただきます、私たちは知っています。」これを持って、何か物事がうまく動くと神が行なっていると勘違いしてしまいます。けれども、次の節にはこうあります。「なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。(29 節)」神が益と思われていることは、私たちが御子のかたちと同じ姿になることです。私たちがキリストに似た者になることこそが、神は最善のことだとお考えになっています。

## 2B 弱さを担う強い者 — イエス様

そして続けて本文の 5 節を見てください。兵士たちの勧めによって、「**ダビデは立って行き、サウルの上着の端をひそかに切り取った。**」とあります。けれども「**ダビデは、サウルの上着の端を切ったことを後悔し**」ました。ここにダビデの繊細な心があります。彼は思い切ってサウルに近づき、上着の端だけ切ってみました。けれどもそれだけでも心を痛めたのです。

私たちは心を痛めることをしたくないと思います。できるだけ心が痛まないように、自分を守っていたいと思います。けれども、心を痛めることなくして神を、そして人を愛することはできるでしょうか？そもそも、自分の罪を悲しむことは心を痛めることです。その時は痛いですが、後に平和と義の実を結ぶことのできる痛みであります。そして人を愛する時に、私たちは心を痛めます。もし痛まないのであれば、私たちの心はどうにかしています。けれども、数多くの人が心を痛くしたくないので、そのような場面を避けようとするのです。それは、快適で楽な道かもしれませんが、キリストが私たちを愛して、十字架に進まれた道とは正反対であることは確かです。

ところでダビデは、サウルを殺す力を十分に持っていました。何百人ものペリシテ人をも倒すことのできる彼が、一寝入りしているサウルを殺すことなど、何の努力もなくできるのです。しかし、彼

はその力を行使することがなかったのです。私たちは、行なえる力があればそれを行なおうとする強い意志があります。けれども、その私たちの力は必ずしも人の徳を高めているとは限らないのです。あまりにも当たり前に行けるとしてもそれをあえて行なわない、それは隣人を愛して、その人の徳を高めるためです。

「私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません。私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。キリストでさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかったのです。むしろ、「あなたをそしる人々のそしりは、わたしの上にふりかかった。」と書いてあるとおりです。(ローマ 15:1-3) イエス様が最も強い方でした。十字架にかかる道は、主があえて行なわれておられたものでした。この方は、天使の十二軍団を呼び寄せて、ご自分を捕える者どもを一瞬にして滅ぼすことがおできになったのです。それでもあえて、行なわれませんでした。そして、祭司長などから罵りを受けられました。「神の子であるからその十字架から降りて、自分を救ってみるがよい。」と言われました。それでも、主はご自身の権威と力を行使されなかったのです。

### **3A 主に油注がれた者**

そして 7 節を見てください。ダビデが兵に言いました。「わたしの主君であり、主が油を注がれた方に、わたしが手をかけ、このようなことをするのを、主は決して許されない。彼は主が油を注がれた方なのだ。」ダビデは、自分自身が主に油注がれた者でした。そして確かにサウルに主が油注がれましたが、サウルは主に不従順であったため、彼は王位から退けられました。それにも関わらず、彼はサウルが一度油注がれた者として、絶大なる尊敬を持っていたのです。

それは、その人の悪を是認せよということではありません。ダニエルを思い出してください。ネブカデネザルが王であった時、彼は王に忠実に仕えていました。彼は王に最善の敬意を払っていました。けれども、王が罪を犯す時には、次のように悩みながら話しました。「わが主よ。どうか、この夢があなたを憎む者たちに当てはまり、その解き明かしがあなたの敵に当てはまりますように。(4:19)」けれども、はっきりと悔い改めることを勧めました。「それゆえ、王さま、私の勧告を快く受け入れて、正しい行ないによってあなたの罪を除き、貧しい者をあわれんであなたの咎を除いてください。そうすれば、あなたの繁栄は長く続くでしょう。(27 節)」

### **1B 上からの権威**

けれども、私たちは、「あれは悪人なのに、どうして私たちは従わないといけないのだ？」と思います。上司が悪ければ、彼に歯向かってさぼっても構わないと判断します。親がだらしがないから、自分は親の言っていることに従わなくてよいと思います。そのように、自分で判断してしまっています。けれども、ダビデは違いました。サウルのように神に従っていない権威についても、その権威を敬ったのです。ローマ 13 章には、こう書いてあります。「人はみな、上に立つ権威に従うべきで

す。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。(1節)」パウロはローマ時代に生きていました。その圧政は、とてつもないものでした。けれども、従うべきだと彼は勧めたのです。

もし私たちが仮に、その権威が悪だからといってその権威を取り除いたらどうなるのでしょうか？ 私たちが今度はその悪に染まることになるのです。悪をもって悪で返す時に、私たちはその相手と全く同じ者になってしまうのです。ダビデがサウルにこう言いました。「昔のことわざに、『悪は悪者から出る。』と言っているのです、私はあなたを手にかけることはしません。(13節)」ゆえに、私たちの良心のゆえに、権威に従うのです。

## 2B 愛をもった服従

そして私たちは、地上における権威だけでなく、互いの人間関係においても服従によって愛を示します。人間関係の基本単位は、初めに夫婦です。パウロは、これをキリストと教会の関係を表していると言いました。妻に対しては、キリストに従うように夫に従いなさいと言いました。夫に対しては、自分の体のように妻を愛しなさい、なぜならキリストが教会のためにご自身をおさげになったから、と言いました。けれども、この戒めの前に彼は大前提として、こう話したのです。エペソ 5章 21節です。「キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。」この御言葉の後で、今の夫婦関係を語りました。つまり、従う、あるいは服従するのは、妻が夫に対してだけではなく、夫も服従するのです。

それは、夫が自分のからだのように妻を愛するというのに、自分の意志を働かせるところに現れます。夫は、自分だけで仕事をしたい、妻のことは顧みないで仕事だけしていたい、という肉があります。けれども、その肉を退けて、キリストに服従するがゆえに、妻と共に生活して、彼女を敬うのです。同じように、親と子の関係でも、親は服従するのです。それは、子を主にあって教育していくことで、従うのです。子を教育することも、自分の肉はしたくないことです。子を勝手にさせておく、あるいはそのまましたいことをしているようにさせる、あるいは自分の都合に合わせて動いてくれるように仕向けたいと、自分の肉は願います。けれども、それを神の命令に服従するがゆえに、子を親に従わせるよう教育します。そして、雇用関係でも同じで、主人は決して自分の雇用している労働者を虐げてはならない、あなたの主人が天におられるのだから、この方を恐れよ、と勧めています。

そして教会において、互いに仕えることにおいても、それは根本的に、自分をキリストの命令に服従させることによって、自分の気持ちや思いを神の前に落とすことによって可能です。どんなに自分に言い分があっても、まず自分自身がキリストの命令に従うのです。愛する、というのは私たちの気持ちから出てくるものではないことを、私たちは先週、ヨハネ 13章から学びました。

#### 4A 裁きの委ね

そしてダビデは、サウルが洞穴から出て行った後に、彼の前に現れてこう言いました。「どうか、主が、私とあなたの間をさばき、主が私の仇を、あなたに報いられますように。私はあなたを手にかけることはしません。(12 節)」主が裁きを行なわれる、と明言しています。主にあらゆる裁きと判断を委ねたのです。

#### 1B 主の命令

イエス様が私たちに命じられました。「さばいてはいけません。さばかれないためです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。(マタイ 7:1-2)」神にのみ与えられている権利がいくつかあります。その一つは、命を与え、また命を取る権利です。私たちは人の生命に対して、それに何も加えることはできません。母の胎内で受精し、受精卵が孵化し、胎児になり、出産するまでその過程は神のみぞ行なうことのできる力です。そして人を殺すことも同じです。殺人でなければ、人が死ぬのは神が定められたものです。私たちは、人が死んだ時にその人のことを追悼することは良いですが、本質的には、神に出会わないといけません。神に与えられた命には期限があるのだという峻厳な事実を自分の心にかみ締めるのです。

そして人に与えられていない権威は、「裁く」ことです。物事を裁断し、判断する権利は神にのみ与えられています。もちろん、神は人が人を裁く制度を与えておられます。裁判制度は神から来たものです。けれども、それは神が与えられた力であって、その範囲の中で裁判官が行うものであり、その範疇を越えて行なうことはできません。また、教会にも裁きなさいと命じられている箇所があります。それは、あくまでも主が与えられた御言葉によって知恵と知識が与えられ、客観的に人の罪や不義を見ていくことです。また偽りの教えについて吟味すること、善悪を判断することも、主に命じられています。

けれども、これらのことは全て、神を恐れ、神の権威の中で行うことです。自分が判断基準になり、それで周囲のこと、他人また自分自身を判断することは、「さばいてはならない」というイエス様の命令に違反することになります。

#### 2B 他者に対して

興味深いのは、私たちは他者が天国に行ったのか地獄に行ったのかを簡単に裁断することです。あの人は救われているのかそうでないのか、それを聖書に書いていない基準で裁いていきます。これには両極端があります。御子を持たなければ神を持っていないというヨハネ第一の言葉にあるように、人はイエス・キリストの御名のみによって救われます。信じない者は裁かれています。けれども、そういう真理の言葉を言うことを「裁いている！」という人たちがいます。その反面、イエス・キリストを口で告白したことのない人のことを、簡単に「この人は天に入っています。」と話し

す。

すべて、これらの議論は「裁いてはならない」という過ちを犯しているのです。私たちは人の行く末を見るのではなく、神ご自身を見上げるべきです。他者に対してではなく、自分自身が大胆に御国の中に入ることができるのかどうかを、その選びと召命を確かなものにしていくべきであって、他者に対して行なうものではありません。

イエス様は生まれつきの盲人を見て、弟子たちが、「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。(ヨハネ 9:2)」と尋ねました。私たちは自分たちに理解できないことが起こると、必ずその状況を裁きたいと思います。「これこれが理由で、こうなっているのだ。」と、その状況を判断したいと願うのです。これが私たち人間に与えられた罪性です。悪魔がエバに、「神のようになって、善悪を判断できるようになる。」と言ったのと同じです。ところがイエス様は、「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。(3 節)」と言われました。そしてイエス様は、その業をご自身で行われたのです。目を開かれました。イエス様でさえ、この盲人を裁かれませんでした。むしろ、父なる神に服して、今、命じられている業を行なうことに務められたのです。

### 3B 自分に対して

そして他人だけではなく、自分自身に理解できないことが起こるときに、それを裁く傾向を私たちは持っています。ヨブがそうでした。自分に起こった災いが自分の罪に拠らないことを彼は知っていました。けれども、ならばどうして？という疑問を拭い切れませんでした。それで自分が正しいことを延々と神に申し上げていくのです。神がこうだと言われていることについて、私たちは自分たちを裁くべきですが、神が語っておられないことについて、私たちも同じように口をつぐむ必要があります。チャック牧師がこう言いました。「理解できないことが起こったら、すでに理解できるところに立ち戻りましょう。」愛する人が交通事故で死ぬのは理解できません。けれども、神が善い方であることは知っています。理解できないことで、既に知っている神の知識を捨てる必要はないのです。